

産業資本と貨幣

——「貨幣の資本への転化」問題への一視角——

片岡俊郎

I 序 説

マルクスは、『資本論』、第1巻、第2篇「貨幣の資本への転化」、第4章「貨幣の資本への転化」を、第1節「資本の一般定式」、第2節「一般定式の矛盾」に続けて、第3節「労働力の買いと売り」で結んでいる。本稿では第3節「労働力の買いと売り」を取扱い、「貨幣の資本への転化」問題への一視角を提示しようとしたものである。⁽¹⁾

なお、この第3節「労働力の買いと売り」は、労働力商品の創出過程として、一般には『資本論』、第1巻、第7篇「資本の蓄積過程」、第24章「いわゆる本源的蓄積」と併せて考察されることが多いのであるが、本稿では上記第3節を『資本論』全3巻体系の中に位置づけることを中心にして「貨幣の資本への転化」問題への一視角を提供しようとしたものである。それというのもわれわれが目したい第3節「労働力の買いと売り」で述べられている商品流通、貨幣流通の問題を正面から取上げるためには、特に、貨幣を運動のなかで、あるいは循環のなかで把握する視点がとられている『資本論』、第2巻、第1篇「資本の諸変態とそれらの循環」での、いわゆる3資本循環視点の参照が必要と気づいたからである。この示唆がなにをもたらしたかは本稿を追っていくうちに明らかになるのであるが、一つは『資本論』、第1巻、第2篇「貨幣の資本への転化」は、それに続く第3篇「絶対的剰余価値の生産」以下の第1巻の序章をなすと

(注)(1) 私は、「商人資本と貨幣—＜貨幣の資本への転化＞問題への一視角—」（『関西学院経済学研究』第4号、1971年）で第1節「資本の一般定式」、第2節「一般定式の矛盾」を分析した。本稿はそれに続くものである。

産業資本と貨幣

ともに、第1巻からそれに続く第2巻にとっても序章であるということが示されるであろう。二つには、第3節「労働力の買いと売り」は注意して読めば貨幣所有者と商品所有者の関係をとおして分析されているのであるが、それは『資本論』、第2巻、第1篇での3資本循環視点が明確にされることによって、前篇、前章、前節からわれわれが常に問題にしてきた貨幣所有者が本章、本節に到ってなぜ産業資本家でなければならないかが示されるであろう。

II 「労働力の買いと売り」

マルクスは「労働力の買いと売り」の冒頭を、次のように始めている。「資本に転化すべき貨幣の価値変化は、この貨幣自身について起こりうるものではない。なぜかというに、購買手段として、また支払手段としては、貨幣は、ただ買ったり支払ったりする商品の価格を実現するにすぎない。他方において貨幣は、それ自身の形態を固執しながら、同一なる価値量の化石に凝結する。第二の流通行為から、すなわち商品の再販売から、この変化が発生しうるということもありえない。なぜかというに、この行為は、商品をたんに自然形態から貨幣形態に転化させるだけであるからである。かくして変化は、第一の行為G-Wにおいて買われる商品について起こらなければならないのであって、その価値についてではない。なぜかというに、交換されるのは等価であって、商品はその価値どおりに支払われるからである。したがって、変化は、もっぱら商品の使用価値そのものから、すなわち、この商品を消費することから発生しうるのみである。ある商品の消費から価値を引出すためには、わが貨幣所有者はきわめて幸運でなければならないのであって、流通部面の内部、市場で、一つの商品を発見しなければならぬ。その商品の使用価値自身が、価値の源泉であるという独特の属性をもっており、したがって、その実際の消費が、それ自身労働の対象化であって、かくて、価値創造であるというのでなければならぬ。そして貨幣所有者は、市場でこのような特殊な商品を発見する—労働能力または労働力がこれである⁽¹⁾。(傍点、筆者。)ここで、マルクスは前節までの分析と同様

貨幣所有者に注目して、等価交換を前提としたうえでの価値増殖の源泉を「商品の使用価値そのものから、すなわち、この商品消費することから発生する」特殊な商品、労働力を発見したのである。そこで労働力について次のような説明を展開することになる。

まず、マルクスは労働力を次のように述べている。「われわれは、労働力または労働能力を、一人の人間の肉体、すなわち、人間の生ける人格の中にあつて、何らかの種類の使用価値を生産するばあい、人間が活動させる肉体的、精神的⁽²⁾能力の総体である⁽²⁾と考える。」

次に、マルクスは「貨幣所有者が労働力を商品として見出すためには、いろいろな条件が充たされなければならない⁽³⁾」としながら次の二つの条件で結論づけている。一つは労働力それ自体の所有者が人格的に自由であり、二つは一切の物財から自由であること、つまり二重の意味での「自由なる労働者」の存在である⁽⁴⁾。

そして、マルクスは「この独特なる商品、労働力をいま少し詳しく考察しよう⁽⁵⁾」として、労働力の価値がなにによって規定されるかを次のように説明する。「労働力の価値は、すべての他の商品の価値に等しく、この特殊なる商品の生産、したがってまた再生産に必要な労働時間によって規定される。それが価値であるかぎり、労働力自身は、ただその中に対象化された社会的なる平均労働の一定量を代表するにすぎない。労働力は、ただ生ける個人の能力として存するのみである。したがって、その生産は、彼の生存を前提する。個人の生存を与えられたものとすれば、労働力の生産は、彼自身の再生産または維持である。彼の維持のために、生ける個人は、一定量の生活手段を必要とする。労働力の生産に必要な労働時間は、かくして、この生活手段の生産に必要な労働時間に解消される。すなわち労働力の価値は、その所有者の維持のために必要な生活手段の価値である。だが、労働力はただその支出によってのみ実現される。すなわち、ただ労働においてのみ活動する。しかしながら、その活動、すなわち労働によって、人間の筋肉、神経、脳髓等々の一定量が支出される。これは

産業資本と貨幣

再び補充されなければならない。この支出が増大すれば、摂取も増大される必要がある。もし労働力の所有者が今日労働したとすれば、彼はこの同一過程を、明日、力と健康の同一条件の下で、繰返しえなければならない。したがって、生活手段の総額は、この労働する個人を、労働する個人として、その正常なる生活状態に維持するに足りなければならない。食料、衣服、暖房、住居等々のような自然的な欲望自身は、一国の気候的および他の自然的特性にしたがって異なる。他方において、いわゆる必要なる欲望の範囲は、その充足の仕方と同じく、それ自身歴史的な産物であって、したがって、大部分は一国の文化段階に依存している。なかんずく、また根本的に、自由なる労働者の階級が、いかなる条件の下に、したがって、いかなる習慣と生活要求をもって構成されてきているかということに依存している。したがって、他の商品と反対に、労働力の価値規定は、一つの歴史的な、そして道徳的な要素を含んでいる。だが、一定の国にとって、一定の時代には、必要なる生活手段の平均範囲が与えられている⁽⁶⁾としながら、それにつけくわえて、労働力の補充人員の再生産費すなわち労働者の子供達の再生産費と労働力の質的向上費すなわち労働者の教養費あるいは教育費にもふれている。そこで、マルクスは以上のものを加味して、「労働力の価値は、一定額の生活手段の価値に解消する⁽⁷⁾」と結論する。

そこで、「労働力」商品の本来の性質ということになるが、それは二重の意味で自由である「自由なる労働者」の使用と労働力の価値規定がその使用とは無関係に外的になされるということから出てくる。すなわち、貨幣所有者が労働力の価値が労賃として外的に決定された労働力の所有者をいったん「商品市場」で買ったならば、労働力の所有者は自分自身の再生産のために貨幣所有者に自分自身を売らねばならないという性質のゆえにその使用は全く貨幣所有者の自由にならざるをえないということから出てくるのである。ということは、貨幣所有者は労働力の消費過程を通して価値増殖出来る保証を獲得したのである。⁽⁸⁾ここにいたって等価交換を前提としたうえでの価値増殖の基盤をマルクスは解き終えたのである。⁽⁹⁾

マルクスは、前節まででは不等価交換による商人資本の収奪をも価値増殖という意味で資本と呼んでいる。このように不等価交換による価値増殖そのものを資本と呼んだ資本概念が、本節「労働力の買いと売り」で「労働力」なる商品そのものを問題にした場合、前節までの問題がどのように展開されているのか、それを追及する必要がある。そのためには『資本論』、第2巻、第1篇で問題にされているいわゆる3資本循環視点の参照を必要とするのであるが、そこでとりあえず本節で問題として整理しておかなければならないのは次の二点である。第一は、貨幣所有者と商品所有者とが本節「労働力の買いと売り」の軸として説かれていることに注目して貨幣所有者とは一体何なのか、なぜ想定されているのかを究明することである。次に第二は、マルクスが本節で述べている資本が「生産手段及び生活手段の所有者が、自由なる労働者を」発見するところにおいてのみ成立するものであるとすれば、「歴史的にきわめてちがった経済的な社会形式に共通である」商品流通、貨幣流通は資本制生産様式下では如何に把握されなければならないか、又は資本の分析に際して、商品、貨幣の分析がどのような意味をもつかを明確にすることである。⁽¹⁰⁾

(注)(1) K.マルクス『資本論』、岩波文庫第1分冊、290-291ページ。以下『資本論』からの引用は本文庫により、その分冊、ページ数のみを示す。

(2) 『資本論』、第1分冊、291ページ。

(3) 『資本論』、第1分冊、291ページ。(傍点は筆者。)

(4) 「貨幣の資本への転化のために、かくて、貨幣所有者は、自由なる労働者を商品市場に見出さなければならぬ。二重の意味で自由である。すなわち、彼は自由な人格として、自分の労働力を商品として処置しようということ、彼は他方において、売るべき他の商品をもっていないということ、すなわち、彼の労働力の現実化のために必要な一切の物財から、放免され、自由であるということである。」(『資本論』、第1分冊、291ページ。なお、傍点は筆者。)

(5) 『資本論』、第1分冊、296ページ。

(6) 『資本論』、第1分冊、297-298ページ。

(7) 『資本論』、第1分冊、299ページ。

(8) 「われわれは、いま、この特有の商品である労働力の所有者にたいして、貨幣所有者から支払われる価値の規定の仕方を識るにいたった。他方この後者が交換において受

産業資本と貨幣

取る使用価値は、実際の使用で、すなわち、労働力の消費過程ではじめて示される。原料等々のようなこの過程に必要なすべての物を、貨幣所有者は商品市場で買い、これを価格一杯に支払う。労働力の消費過程は、同時に商品と剰余価値の生産過程である。労働力の消費は、他のすべての商品の消費と同じく、市場または流通部面の外で行なわれる。それゆえに、われわれは貨幣所有者や労働力所有者と一緒に、この喧しい、見かけだけの大騒ぎの行なわれている、そして誰の眼にもとまる部面をすてて、この二人にしたがって、かくれた生産の場所に行こう。その入口には〈無用の者入るべからず〉と書いてある。ここでは、ただ資本がどういうふうに生産しているかを示しているだけでなく、人はどうして資本そのものを生産しているかが見られる。貨殖の秘密もついに明るみに出ざるをえない。』（『資本論』、第1分冊、305-306ページ。なお、傍点は筆者。）

- (9) マルクスは、第2篇、第4章、第3節を次のように結んで、貨幣所有者と労働力所有者のさらにつき進んだ分析を続く第3篇以下で展開することになる。「先の貨幣所有者は資本家として先頭に進んでいる。労働力所有者は、その労働者として彼の後に従っている。一人は意味深そうにあいそ笑いしながら、業務に心を奪われた人のように。他の一人は、おずおずといやいやながら、ちょうど身を投げ出して尽くしても、もはや――打ちのめされるほかに、何も期待できない人のように。」（『資本論』、第1分冊、306-307ページ。なお、傍点は筆者。）
- (10) マルクスは資本制生産様式を商品生産、商品流通の最高の発展段階としながら、商品生産、商品流通の分析には最高の発展段階を必要としないし、又、商品生産、商品流通の分析が交換価値の支配、すなわち資本制生産様式を前提としなかったと同様、貨幣流通の分析にも商品交換のある程度の高さを前提するだけで充分であると述べている。すこしながくなるが重要であるから引用しておく。「われわれが、以前に考察した経済的な諸範疇も、その歴史的痕跡をつけている。生産物の商品としての存在の中にも、一定の歴史的条件が包み込まれている。商品となるためには、生産物は、生産者自身にたいする直接の生存手段として生産さるべきではない。われわれがさらに、どんな事情の下で、すべての生産物が、または生産物の多数だけが、商品の形態をとるかということを研究してみれば、このことは、ただ一つの全く特殊な生産様式、すなわち資本制生産様式の基礎の上においてのみ起こるということを発見するであろう。だが、このような研究は、商品の分析にはさしあたって必要でなかった。商品生産と商品流通は、はるかに多数の生産物量が、直接に自家用に向けられて、商品に転化されず、したがって、社会的生産過程が、なおまだ少しもその全的な広さと深さにおいて、交換価値の支配するところとなっていなくとも、起こりうるのである。生産物が商品として表わされるのを条件づけるものは、社会内における分業がある程度発達して、直接の物々交換において始まったばかりの使用価値と交換価値との分離が、

すでに行なわれた状態にあるということである。しかして、このような発展段階は、歴史的にきわめてちがった経済的な社会形式に共通である。

あるいは、われわれが貨幣を考察するならば、それは商品交換のある程度の高さを前提している。単なる商品等価、または流通手段、あるいは支払手段、蓄蔵貨幣および世界貨幣というような、特別の貨幣諸形態は、それらのある機能または他の機能のおおのが働く範囲の大小とそれらの相対的な重要さにしたがって、社会的生産過程のきわめてちがった段階を示唆する。それにしても、経験的には、比較的微弱に発展せる商品流通があれば、これらすべての形態の形成には足りる。資本についてはこれと異なる。その歴史的な存立条件は、決して、商品流通や貨幣流通があれば、いつもあるものではない。資本は、生産手段および生活手段の所有者が、自由なる労働者を、彼の労働力の売り手として市場に見出すところにおいてのみ成立する。そして、この一つの歴史的な条件は、世界史を包括する。したがって、資本は、初めから、社会的生産過程のある時代を告知するのである。』（『資本論』、第1分冊、295—296ページ。なお、傍点は筆者。）引用の前半部分においては史的分析の叙述に、後半部分においては商品等価、流通手段、支払手段、蓄蔵貨幣、世界貨幣との関連に注目したい。この注目は本節を『資本論』体系のなかに位置づけることによってその重みを増すであろう。

Ⅲ 3 資本循環視点と貨幣

『資本論』、第2巻「資本の流通過程」、第1篇「資本の諸変態とそれらの循環」は、第1章「貨幣資本の循環」、第2章「生産資本の循環」、第3章「商品資本の循環」と展開されて、いわゆる3資本循環視点が明確にされている。勿論、本篇は資本制生産様式下の産業資本を前提として説き進められているが、われわれがここで注目したいのはそこで問題とされている循環論的視点である。

循環論的視点とは、例えば貨幣資本循環であれば、 $G - W \cdots P \cdots W' - G'$ で示されるように、貨幣資本→生産資本→生産資本の消費→商品資本→より増大した潜在的な貨幣資本というように、貨幣資本が貨幣資本から出発して生産資本、商品資本を媒介にして貨幣資本に回帰するさまが動きとして、あるいは運動のなかで把握されていることと、一時点における存在としては貨幣資本のみが単独に存在するのではなく、貨幣資本、生産資本、商品資本の並存として把握されていることに要約しうる。したがって、貨幣資本循環視点、生産資本循環視点、商品資本循環視点の3資本循環視点は、3資本の並存を前提としての3資

産業資本と貨幣

本の運動をそれぞれ明確にするものであると理解しえる。マルクスがこのように3資本循環視点を並存と運動によって展開しえたのは、マルクスが商品、貨幣の分析の上に、貨幣資本、生産資本、商品資本の差異、とりわけ労働力を軸として生産資本の特殊性を明確にしえたがゆえに3資本の区別を可能にしたことは注目を要する⁽¹⁾。そしてマルクスがこの3資本循環視点を先学から学んだことは次のようなマルクスの先学に対する批判的検討を通して知ることが出来る。

先ず貨幣資本循環視点 ($G \cdots G'$) は、価値の増殖という面をみるのにはきわめてすぐれた視点であった。しかし、この視点に立った重商主義は増殖という面をみたが、その結果は貨幣と資本の区別を混同した分析におちいった。

次に生産資本循環視点 ($P \cdots P$) に立った古典派経済学は、生産資本の週期的に更新される機能を明確にし、蓄積過程を説くことには成功したけれども、労働と労働力の区別が出来なかったために、蓄積論に先立つ剰余価値論は解けなかった。しかも、商品の蓄積として説かれたために、貨幣の独自性は解けず、貨幣は単なる媒介手段として、流通手段としか理解されなかった。

最後に商品資本循環視点 ($W' \cdots W'$) は、生産されて市場にある商品を問題にしたために、商品のもつ二面性すなわち直接その商品の生産者の手元にある面と、その商品を他の商品生産者が買取って新たな商品生産のために利用する面に気づいた。そのことは商品の生産者は他の商品の生産者を前提とせざるをえなくなり商品資本循環視点が生産過程の分析の中に相互の絡み合いを問題にした点において偉大な進歩をなしとげた⁽³⁾。この視点は、ケネーの経済表をもって最高の端緒とされるのであるが⁽⁴⁾、こと貨幣の分析にいたっては、絡み合いを重要視したために貨幣は無視されざるをえなかったのである。

貨幣資本循環視点からする重商主義の貨幣と貨幣資本の混同、生産資本循環視点からする古典派経済学の貨幣の流通手段としての取扱い、商品資本循環視点からするケネーの経済表における貨幣の無視、その批判の上に立ってマルクスは『資本論』の冒頭を「商品と貨幣」で始めたと見る事が出来る。その理由は、商品生産一般の上に資本制的商品生産の特殊性を位置づけようとするマ

ルクスの手法によるものである。確かに、労働力商品を軸としてはじめて3資本循環視点が問題になるのであるが、労働力商品の特殊性を明確に把握するためにも、「歴史的にきわめてちがった経済的な社会形式に共通である」商品流通、貨幣流通の分析、つまり商品、貨幣についての分析が先ず必要であったのである。

次にIIで問題にされた貨幣所有者は『資本論』、第2巻、第1篇では、次のように述べられている。「 $G - W < \overset{A}{P_m}$ 〔貨幣資本の生産資本への転化…筆者〕は、この行為を行う個人が任意の使用形態にある諸価値を処理し得るのみではなく、これらの価値を貨幣形態において所有すること、彼が貨幣所有者であることを前提する。しかるに、この行為はまさしく貨幣の譲渡を本体とするのであって、かの行為者が依然として貨幣所有者であり得るのは、この譲渡行為そのものによって貨幣が彼の手へ還流することが含意されている限りにおいてのみである。しかるに、貨幣は、商品売ることによってのみ、彼の手へ還流し得る。したがってこの行為は、彼が商品生産者であることを前提しているのである。⁽⁵⁾」ここで、貨幣所有者は商品生産者と前提されるのであるが、注目したいのは貨幣所有者は資本制生産様式下における生産資本の購入者であるという意味での商品生産者と断定されている点である。⁽⁶⁾すなわち、貨幣所有者は商品生産の物的要因である生産手段を本来の商品市場で、商品生産の人的要因である労働力を労働市場で購入するのである。購入された生産手段、「自由なる労働者」は消費されてはじめて価値増殖するという意味で生産資本であり、したがって生産資本を機能させるのが産業資本なのである。⁽⁷⁾ともあれ、商品生産者を前提とした貨幣所有者と産業資本との関連は念頭におく必要がある。

(注)(1) 「いわゆる農民解放の結果、いまでは農奴的強制労働者のかわりに賃金労働者を用いてその農業を営んでいるロシアの土地所有者は、二つのことについて苦情を言う。第一には、貨幣資本の欠乏について。たとえばこういうことが言われる。収穫物売る前に、比較的大きい規模で賃金労働者に支払わねばならないのに、その第一条件が、現金が、足りないのだ、と。生産を資本家的に経営するためには、貨幣形態における資本が、まさに労働賃金の支払いのために、たえず手許になければならない。しかし

産業資本と貨幣

この点については、土地所有者たちは安心してよい。季節がくればバラも咲く、そして産業資本家は、自分の貨幣だけではなく、他人の貨幣も動かすことができるのである。

しかし、もっと特徴的なのは第二の苦情である、すなわち、たとえ貨幣をもっている、買える労働力を随意の時期に、十分な量、見出すことができない、と。それというのは、ロシアの農村労働者は、村落共同体の土地共有のために、まだ完全には自分の生産手段から分離されておらず、したがって、まだ言葉の十分な意味で「自由な賃金労働者」ではないからである。しかし、社会的規模における賃金労働者の存在は、 $G-W$ すなわち貨幣の商品への転化が、貨幣資本の生産資本への転化として現われうするためには、欠くことのできない条件なのである。』（『資本論』、第4分冊、54ページ。）ここでは例証をあげつつ労働力商品の特殊性を説明するマルクスの論理に注目したい。マルクスにおいては歴史的事実は単なる歴史的素材ではなしに論理把握のための素材であることに注意を要する。

(2) 『資本論』、第4分冊、127ページ。

(3) 「 $W' \cdots W$ なる形にあっては、商品資本すなわち資本主義的に生産された総生産物の運動は、個別資本の独立の循環の前提として現われると共に、またこれによって制約されたものとしても現われる。それゆえ、この形がその特性において理解されるならば、 $W' - G'$ 及び $G - W$ なる変態が一方では資本の変態における機能的に規定された分節であり、他方では一般的商品流通の環であるというだけでは、もはや充分とは言えない。一個別資本の諸変態と他の諸個別資本の諸変態との、また総生産物中の個人的消費に向けられた部分との絡み合いを明らかにすることが必要となる。』（『資本論』、第4分冊、146ページ。傍点は筆者。）

(4) 『資本論』、第4分冊、148ページ。

(5) 『資本論』、第4分冊、56ページ。（なお、傍点は筆者。）

(6) 「実際において資本主義的生産は、生産の一般的形態としての商品生産なのであるが、しかしそうであるのは、またその発展と共にますますそうなるのは、ここでは労働がそれ自体商品として現われるからであり、労働者が労働すなわち彼の労働力の機能を売り、しかもわれわれの仮定するように、その再生産費によって規定される価値で売ることからである。労働が賃金労働となる範囲で、生産者は産業資本家となる。それゆえ資本主義的生産は（したがって商品生産も）、農村の直接生産者も、また賃金労働者となるに及んで初めてその全範囲で現われる。資本家と賃金労働者との関係においては、貨幣関係が、買手と売手との関係が、生産そのものに内在する一関係となる。しかしこの関係は、その基礎からすれば、生産の社会的性格に基づくもので、交易様式の社会的性格に基づくものではない。逆に後者が前者から生ずるのである。とにかく、生産様式の性格のうちに、これに対応する交易様式の基礎を見るのではなく、その逆を

見るのは、小商売で完全に頭を占領されているブルジョア的限界にふさわしいことである。』（『資本論』、第4分冊、172ページ。）

- (7) 「資本価値がその流通段階の内部でとる二つの形態は、貨幣資本と商品資本との形態である。生産段階に属するその形態は生産資本の形態である。その総循環の経過中にこれらの形態をとっては棄て、各形態においてその形態に対応する機能を行う資本は、産業資本である——ここで産業というのは、それがすべての資本主義的に経営される生産部門を包括するという意味においてである。』（『資本論』、第4分冊、78ページ。）

Ⅳ 産業資本と貨幣

Ⅲで明らかになった、(3資本の) 並存としての物の見方と運動としての把握方法が考慮に入れられるとき、Ⅱで問題にされた第一の点、つまり貨幣所有者とは一体何で、なぜ想定されているかに答えることが出来、さらに3資本循環視点によって明確にされた商品、貨幣分析の資本分析にとっての重要性をつけくわえることによって第二の点、貨幣が資本制生産様式下で如何に把握されるかにも答えることが出来る。

第一の問題である貨幣所有者の問題は、『資本論』、第1巻、第2篇「貨幣の資本への転化」に先行する第1篇「商品と貨幣」、とりわけ第3章「貨幣または商品流通」、第3節「貨幣」を考慮することによって次のように結論づけることが出来る。⁽¹⁾

『資本論』、第1巻、第1篇、第3章、第3節、a「貨幣蓄蔵」で問題とされた貨幣所有者は貨幣蓄蔵者であり、第2篇、第4章「貨幣の資本への転化」、第1節「資本の一般定式」、第2節「一般定式の矛盾」では貨幣所有者は不等価交換を前提とした商人資本として考察されている。⁽²⁾ 貨幣蓄蔵者においては、Ⅲで問題にされた運動としての把握方法がとられた場合、 $W-G-W$ という単純商品流通下であるから、貨幣蓄蔵は $W-G$ 、すなわち流通の中断として把握された。ここでの貨幣蓄蔵者は商品生産者であったが、商品生産者の目的としたものは価値増殖そのものではなくて、貨幣蓄積そのものであった。又、商人資本においては、商人資本の目的が $G-W-G'$ であるから価値増殖そのものが問題になった点においては貨幣蓄蔵者と異なり、商人資本が獲得したものは不等価交換

産業資本と貨幣

を前提とした収奪による価値増殖であった。しかしながら、貨幣蓄蔵者としての貨幣所有者も商人資本としての貨幣所有者も、生産力が発展するにつれて、一方は信用の発生から、他方は等価交換の支配によってその存立基盤を失うのである。ここでも又、Ⅲで問題にされた並存としての物の見方を導入するならば、貨幣蓄蔵者や商人資本が商品市場で発見出来たのは商品と貨幣であった。貨幣蓄蔵者は単に商品よりも貨幣を選択して貨幣蓄積をしたのに対して、商人資本は商品を選択することによってその価値増殖をなしたのである。生産力の発展は貨幣機能を発展させ、等価交換を前提とするようになる、すると貨幣所有者は単に貨幣を持っても価値増殖出来ないと同様、商品の選択も無意味となったのである。そこで価値増殖の基盤を失なった貨幣所有者が新たに市場に発見したのが特殊な商品、つまり労働力であった。特殊な商品、労働力は、単にそれを持っても、又それを移動することによっても、価値増殖出来ない。それは、商品生産の物的要因である生産手段と労働過程において結合されて初めて価値増殖出来るという意味において特殊な商品なのである。したがって貨幣所有者は本来の商品市場で生産手段を、労働市場で「自由なる労働者」を選択した時点でそれを生産過程に投入しなければならないという意味で産業資本家とならざるを得なかったのである。

第2の問題、つまり貨幣については、先ず運動としての把握方法によれば資本制生産様式下では労働力商品が新たに商品市場に加わり、生産資本として登場することによって、貨幣は生産資本の購入形態として、つまり価値増殖の起点である。又、同時に貨幣は生産資本の販売形態である商品資本の実現、つまり、より増加した貨幣として終結点の役目をはたす。これに並存としての物の見方を加味するならば、資本制生産様式下では商品が生産資本、商品資本として存在するがゆえに、購入形態であり終結点である貨幣は必然的に貨幣資本として理解されるのである。ここで注目したいのは、貨幣の貨幣資本への転化が商品の生産資本への転化を軸として産業資本で説かれている点である。このことは資本制生産様式下の貨幣理解に重要な示唆を与えることになる。というの

はここで取り出された貨幣と区別された貨幣資本は資本制生産様式下における商人資本、利子生み資本を分析するにも重要な概念であるとともに、それが産業資本で明確にされた商品の生産資本、商品資本への転化を通して、貨幣の資本への転化を貨幣の貨幣資本への転化としてつかむことは、産業資本と商人資本、産業資本と利子生み資本、そして商人資本と利子生み資本相互の理解にもきわめて重要な位置をしめることになり『資本論』を商品から始まり貨幣分析を経て資本分析へと展開していく体系として把握するためには是非必要なことなのである。

以上のことを本稿で明確にしえたのは、第3節「労働力の買いと売り」を労働力商品の創出過程に力点をおいて第24章「いわゆる本源的蓄積」と併せて考察してきた従来の視点をあえて本稿がとらなかったことによる。しかし、そのことは従来の考察の重要さを無視したわけではない。重要さの点において従来の諸研究は本稿を凌ぐかもしれない。にもかかわらず本稿でこれとは別の視点をあえてとったのは、『資本論』の全体系を理解する上には、特に貨幣論から信用論への展開にあたっては、いままで見落とされてきた視点に光をあてる必要を感じたからである。それはとりもなおさず「貨幣の資本への転化」問題を解く鍵をマルクスの次の示唆に求めたことに帰因している。その意味において次の示唆は重要である。「何ゆえにこの自由なる労働者が、彼〔貨幣所有者…筆者〕に流通部面で相対するにいたるかという問題は、貨幣所有者の関心事ではない。彼は、商品市場の特別の部門として、労働市場を見ているだけである。そして目下のところ、それはわれわれの関心事でもない。われわれは、貨幣所有者が実際的になしているように、理論的にこの事実をしっかりとつかまえておく⁽³⁾」。この個所が無視された理由はそれに続いて述べられた部分の重要性によるといえよう。マルクスは言う。「だが、一つのこと、明らかである。自然は、一方において貨幣所有者と商品所有者とを生産するわけではなく、また他方において、自分の労働力の単純なる所有者を生産するわけでもない。この関係は決して自然史的のものでなく、またすべての歴史時代に共通である社会的関係

産業資本と貨幣

でもない。それは明瞭に、先行の歴史的発展の結果であり、多くの経済的変革、すなわち、永い系列をなす社会的生産の古い諸形式消滅の産物である、とも言うべきものである。⁽⁴⁾前半部分のもつ意味が後半部分の重要さという単なる理由によって無視されたとするならば、『資本論』体系を体系として理解しようとするものにとっては、はなはだ遺憾であり、『資本論』を体系として把握する場合には、当該節の前半部分の示唆にわれわれは関心を示さなければならないことを本稿で明らかにしたかったにすぎない。

このようにして『資本論』、第1巻、第2篇、第4章「貨幣の資本への転化」を第3節「労働力の買いと売り」の解明をとおして当該篇を『資本論』全3巻体系の中に位置づけ、資本制生産様式下の資本の運動解明の序章として明確にすることができたことは、本稿の分析が従来の分析の欠を補うものといえるのではなかろうか。

(私は、本誌第1巻、第1号と第2号で初期ケインズの貨幣観を批判的に検討していく足場を確立したのであるが、初期ケインズ分析の貨幣論的基本視角は処女論文「支払手段としての貨幣—マルクス貨幣論の論理展開—」から第4論文である「産業資本と貨幣—＜貨幣の資本への転化＞問題への一視角—」をへて得られたものである。ここで第4論文を本誌に掲載したのは、以前の発表誌が私的な雑誌であったがゆえに大方の批判を受けていないことと共に、大筋においては何んら変更すべきところはないが、その時点で言い足りなかった点をさらに突っ込んで言及する作業を自身に課したからである。それゆえ、結論部分であるⅣはほとんど手を加えてはいないがⅢ、Ⅱ、Ⅰ、といくにしたがって大巾な書き替えがなされている。本論文によって筆者のなかのマルクスを理解していただければ、今後本誌に展開していくことになるケインズ分析理解の一助となるものと思う。)

(注)(1) 拙稿「支払手段としての貨幣—マルクス貨幣論の論理展開—」(『関西学院経済学研究』第2号、1969年)は『資本論』、第1巻、第1篇「商品と貨幣」、第3章「貨幣または商品流通」、第3節「貨幣」のa「貨幣蓄蔵」とb「支払手段」を取扱い、c「世界

貨幣」は、拙稿「世界貨幣としての貨幣－マルクス貨幣論の論理展開－」（『関西学院経済学研究』第3号、1970年）で考察された。

- (2) 前掲拙稿「商人資本と貨幣－＜貨幣の資本への転化＞問題への一視角－」で『資本論』、第1巻、第2篇、第4章「貨幣の資本への転化」、第1節「資本の一般定式」、第2節「一般定式の矛盾」を考察した。その際、特に商人資本については、『資本論』、第3巻、第4篇、第20章「商人資本に関する歴史的考察」と併せ考えられている。
- (3) 『資本論』、第1分冊、294－295ページ。（なお、傍点は筆者。）
- (4) 『資本論』、第1分冊、295ページ。